

寄木張り



大階段から見た新しい木材との境界

した。細かい作業が多く、施工に時間がかかる寄木張りを採用することは経済的な豊かさも表し、趣向を凝らした模様を形作ることでより豪華で華麗な雰囲気を出してしましました。二葉館では、大広間や展示室に市松張り、廊下にはヘリンボーン張りが採用されており、当時の要人たちを迎え入れる場としてふさわしい空間を作るために取り入れたのだらうと考えられます。

現在の二葉館は移築復元されたもので創建当初の建物そのままというわけではありません。しかし復元に際し残っていた部材についてはできる限り使用し当時の風情を今に伝えています。この寄木張りに使用された木材も残っており、現在も大広間で見ることが出来ます。大広間にある大階段から南側の円形ソファの方を見ると、床の色がわずかながら違うことが確認できます。このソファの付近の寄木は創建当時のものと思われる部材を使用しており、これらには柿渋が塗られていたため色が違って見えているのです。新しい木材で作られた寄木張りも見事なものです。当初の部材を改めて見てみると川上貞奴や福沢桃介のこの建物への想いを垣間見ることができ、二葉館はその価値の高さを現在に伝えていきます。



廊下のヘリンボーン張り

二葉館の大広間や展示室、廊下の床を見ると、木が模様のように張られています。これは寄木張りと呼ばれる建築装飾で、小さな板を一枚一枚に張り合わせてできているものです。「寄木」というと寄木細工や寄木造のような日本の伝統工芸を思い出しますが、寄木張りは明治時代に取り入れられた西洋文化を象徴する建築技法の一つです。当時の華族や政治家、実業家たちは文明開化の中、西洋文化を取り入れた住宅を建てていきましたが、その中でも客人をもてなす応接間などに寄木張りを使用してました。現在は東京都庭園美術館として利用されている旧朝香宮邸や迎賓館赤坂離宮の「羽衣の間」でも見ることができ、その価値の高さを表しています。フランスのヴェルサイユ宮殿の床に張られた寄木張りは特に有名で、宮殿内最大の見どころである「鏡の間」にも使用されており、「ヴェルサイユ張り」とも呼ばれています。

IRODORI いろどり

二葉館が所蔵する貞奴ゆかりの品から、今回は貞奴の女優引退興行記念の品についてご紹介いたします。



引退興行記念品の湯のみ

夫婦湯のみ
白い磁器製の湯のみ茶わんは大小のセットで「兎も角も 隠れ住むべく 野菊かな 貞奴」と直筆の句が焼き付けられています。

葉
表紙に「川上貞奴 引退興行記念の葉」とあり、裏表紙には夫婦湯のみと同じ句が書かれた短冊がひらめいて、移ろう色のもみじと孔雀がデザインされています。

舞い散るもみじの葉を振り返る孔雀は、過ぎし日を回顧しているかのようです。色とりどりの葉は様々な役柄を、ゴージャスな羽をたたんだ孔雀は引退する貞奴を表しているのではないのでしょうか。とても素敵なデザインですね。

中面の写真は、右に役どころの衣装をまとった写真と、左は本紙の表紙で紹介した写真です。末広を手にした貞奴は、無言で引退の口上を述べているようにも見えます。

着物の柄は、まさに「兎も角も 隠れ住むべく 野菊かな」の句を表し描かれています。



引退興行記念品の葉



文化のみち さんぽみち 15

文化のみち 「百花百草」



中央に小川のある庭園

文化のみち二葉館から北西に約15分、白壁筋の街並みを歩いていくと、文化のみち「百花百草」があります。

「百花百草」は、岡谷鋼機株式会社所有する建物をリニューアルし、文化のみちの休憩施設として、平成19年4月に開館しました。470坪という広い敷地には、大正9年に建てられた書院や茶室が並んでいます。本宅跡に新築された多目的ホールでは、随時行われているピアノ演奏を楽しみながら、セルフサービスのお茶などをゆつたりといただけます。多目的ホールから見渡せる庭園には常に花々が咲き乱れており、こちらも散策することができます。

この庭園は、江戸時代後期の絵師・田中訥言作「百花百草図屏風」(重要文化財指定)に描かれた草花を再現するために造られ、施設名の由来にもなりました。「百花百草図屏風」は岡谷家の所有でしたが、現在は徳川美術館に所蔵されています。

アジサイやツワブキ、フジバカマ、リンドウなど70種類以上の植物が収集された庭園の中央には小川が流れており、その両側の花壇では、屏風に描かれた草花以外にも、四季折々の花があふれています。特に3月から5月初旬にかけて花壇いっぱい咲き誇るチューリップは、一度訪れてみて



3月の花壇

- 【文化のみち百花百草】
- 所在地：東区白壁四丁目91番地
- 開館日時：水・土曜日午前10時～午後4時
- 入場料：大人五百円 小・中学生 三百円(小学生未満無料)
- 電話：05293111036



土蔵内に飾られた吊るし籠

たい見どころのひとつです。また、同じく3月には書院・茶室の軒先や、庭園内に建つ土蔵内にたくさんの吊るし籠が飾られ、訪れた人を楽しませてくれます。

「百花百草」では、この美しい庭園を維持するために、摘んだ草花を腐葉土に活用するなど、無農薬での植物育成に努めているとのこと。特に設備では、開館当初からエコの取り組みが行われており、小川や散水には敷地内の井戸水を汲み上げ循環して使用し、館内の電気や照明は屋根に設置されたソーラー発電でまかなっているそうです。また、空調は地下に空気パイプを埋めて地中熱を利用するなど、まさに環境に優しい都会のオアシスを実現しています。この取り組みが評価され、平成19年に中部建築賞、平成20年には名古屋市都市景観賞を受賞しました。

from Archives

書庫棟から

城山三郎の蔵書

昨今は、新型コロナウイルスの影響で、おうち時間が増えた方もいるでしょうか。いつもより読書の時間が増えたという方もいるかもしれません。本を借りたい、書店で買ったり、図書館で借りてきたり、他にもインターネットでダウンロードすれば本棚の場所に困りませんし、雑誌や漫画なら専用アプリでサブスクリプション(※)を受けられます。それでも、本を手に取って感じたいという時は図書館を活用するなど、今の私たちが、生活や優先順位に合わせた選択ができます。



城山氏の書棚(復元)

まずね。城山氏は学生時代、寮の押し入れに電灯を持ち込んで昼夜問わず読書に没頭したり、寮が停電すると電車の明かりで読書を読んだという逸話があります。作家になつてからも、小説のモデルとなる人物や出来事について、自身でも取材に赴くために様々な文献や資料を大量に読みこむなか、その蔵書から推察される読書量には驚かされるばかりです。二葉館の二階展示室には、城山氏の書齋が復元されていますが、その机上や本棚に置かれた資料は、城山氏の知識のこく一部でありませぬ。

二葉館では、二〇二二年の二月から「没後15年 経済小説の父 城山三郎展」を開催します。今こそ、銀行や流通を扱った経済小説は数多く見られますが、その分野を切り開いた先駆者こそが城山氏でした。経済小説は、綿密な調査や資料、取材が必要な分野です。

今回の展示では、城山氏が本名の杉浦英一として刊行した『中京財界史』を、作家としての起点となつた『中京財界史』を中心として、日本の資本主義経済化をすすめた渋沢栄一が主人公の『雄気堂々』など、経済小説の主な作品を貴重な資料とともに展示します。ぜひ、ご覧ください。



『中京財界史』(上下) (中部経済新聞社)

しかし、作家など文筆を生業とする人々にとって、やはり本や資料は手元に置くのが一番だったようです。二葉館の書庫には、郷土ゆかりの作家や研究者などの方々から寄贈を受けた文学資料が、なんと五万五千点以上収蔵されています。そのうち、書籍は約三万八千冊。毎日三冊ずつ読んでも、三十四年はかかる計算になります。その中でも、作家・城山三郎氏から寄贈された蔵書は一万七千冊を超えます。これだけでも、毎日三冊を読んで十五年はかかり

※料金を支払うと、製品やサービスを定期的に間利用することが出来るシステム